

# 高校調査書の「出欠の記録」の評価活用の検討

—大学入学後の学籍状況と GPA との関連—

林 寛子 (山口大学)

本研究は、高校調査書の活用の是非、および活用方法の検討の一つとして、高校調査書の「出欠の記録」に注目し、山口大学の受験者および入学者のデータを基に調査書活用の有効性を検証することが目的である。高校の欠席率は大学入学後の学籍状況、学業成績に影響を与えるという仮説を検証するために、山口大学受験者の「出欠の記録」の実態、および入学者の「出欠の記録」と入学後の状況との関連を分析した。結果、高校の欠席率が高い者が退学し、学業成績が低い傾向にあることが確認できた。しかし、高校調査書の「出欠の記録」と大学入学後の在籍状況や学業成績に関連があるとしても、それを大学入試の評価に用いることには新たな疑問も生じ、慎重に検討しなければならないと考える。

キーワード：高校調査書、出欠の記録、欠席率、学籍状況、GPA

## 1 はじめに

大学は、2021 年度入試からの大学入試改革を目指して、多様な背景をもつ人に、多様な入試方法、多様な評価尺度で大学入試を実施することが求められてきた。その流れの中で、『高大接続改革実行プラン』（文部科学省、2015）では、各大学における個別選抜は、学力の三要素の「思考力・判断力・表現力」と「主体性・多様性・協調性」を評価することが求められ、その評価の方法として小論文、プレゼンテーション、集団討論、面接、推薦書、調査書、資格試験等を用いた評価が示され、大学入試の選抜資料として高校調査書の積極的活用が求められてきた。

これまで進められてきた入試改革は、大学共通テストにおける記述式問題と大学入試英語成績提供システムの導入が見送られ、見直しが必要になった。しかし、調査書の活用についてはこれまでも、また今後についても強く活用の方針が示されてはいない。各大学に任されているような状況下で、山口大学では、2021 年度入試における調査書の活用は、面接を行わない入試においては活用しないことを公表した。他大学の状況を確認すると、高校調査書の評定値や「出欠の記録」を大学の基準に基づいて点数化して評価すると活用方法を明確に表明している大学<sup>1)</sup>もあったが、多くの大学が告知文で山口大学同様に当面は活用しないことを公表していた。新学習指導要領に移行する 2025 年度から実施する方向で検討することを公表している大学<sup>2)</sup>もあった。調査書の活用強化も、大学入試改革の大きな目玉の 1 つであり、決して今後一切活用しないという状況ではない。山口大学においても活用方法

についてはまだ検討段階という状況にある。

本研究は、今後決定すべき高校調査書の活用の是非、および活用方法の検討の一つとして、高校調査書の「出欠の記録」に注目し、山口大学の受験者および入学者のデータを基に調査書活用の有効性を検証することが目的である。

## 2 高校調査書の「出欠の記録」に関する検証

### 2.1 高校調査書に関する検証状況

2020 年度入試まで活用した高校調査書には 1.各教科の評定値, 2.全体の評定平均値, 3.学習成績概評, 4.成績段階別人数, 5.出欠の記録, 6.特別活動の記録, 7.指導上参考となる諸事項, 8.総合的な学習の時間の内容・評価, 9.備考を記入する欄がある。

大学は、2021 年度入試からの大学入試改革を見据えて、各大学は大学入試における高校調査書の活用方法を検討してきた。『大学入試研究ジャーナル』を見るだけでも高校調査書の 1.評定値, 2.評定平均値, 3.学習成績概評を大学入試の評価として活用するための検討(日下部・福島 2019, 宮下・飯田 2019, 平井 2017, 2018)がある。1.評定値, 2.評定平均値, 3.学習成績概評は調査書の活用の中心となっている。他にも、6.特別活動の記録を大学入試の評価として活用するための検討(林 2018), 7.指導上参考となる諸事項の記述内容を大学入試において評価するための検討(並河・吉田・坂本 2019)があり、複数の項目にわたって調査書活用の検討を行った研究(吉村 2019)もある。近年の『大学入試研究ジャーナル』には高校調査書に関する研究が多数みられるが、5.出欠の記録

についての検証が見られない。

「出欠の記録」の検証について、吉村 (2019:67) は、「出欠の記録については、皆勤については評価してもよいのではないかという声がある一方、怪我・病気その他様々な事情があるので入学者選抜に利用すべきではないという高校教諭の声もあり」と、検討の対象としない理由を説明している。日下田・福島 (2019:66) は、「高校調査書から得られる定量的情報は評定平均値だけではない。調査書から把握できる高校時代の欠席日数をモデルに追加することは、技術的には可能である。(略) 欠席日数を学校生活適応指標だと見なせば、それが大学生活への適応を介して大学入学後の成績に影響を与えるという仮説を立てることも可能だ。」と指摘しているものの、その検証は行われていない。

この仮説については、山口大学においても大学入学後の退学や休学に関する議論では指摘されてきた仮説である。しかし、山口大学においても吉村の指摘と同様、志願者の健康面に配慮するかたちで入試において「出欠の記録」を確認することはなく、検証するためのデータを備えていなかった。そのため、2018 年度入試から高校調査書の活用を検証するために「出欠の記録」についてもデータを蓄積した。

## 2.2 高校調査書の変更と「出欠の記録」

高校調査書は 2021 年度入試に活用する高校調査書から変更になる。主な変更点は、2. 評定平均値が「学習成績の状況」に変わる。また、7. 指導上参考となる諸事項の具体的な項目内容の詳細な項目が 5 項目から 6 項目になる。増えた項目は「表彰・顕彰などの記録」である。また、より具体的、詳細に記載できるように枠の拡大が図られた。これらの変更は、高校調査書を活用して「主体性・多様性・協調性」を評価するためのもので、高校調査書変更の中心的な変更である。

「出欠の記録」については、記載順が 5 番目から最後の 9 番目に変更になるが、新旧どちらの調査書においても記載内容は同様である。大学入試における積極的な活用が求められる調査書の見直しにおいてもこれまで同様の「出欠の記録」欄であるということは、山口大学はこれまで面接を行う入試においても活用して来なかったが、全体の流れは決して活用してはならぬというものではないと考えられる。

本研究は、高校調査書の「出欠の記録」を入試における評価として活用することも視野に入れた上で、2018 年度入試受験者および入学者を対象として、高

校調査書の「出欠の記録」の記載の実態を確認するとともに、入学者の「出欠の記録」が大学入学後の在籍状況や学業成績に影響を与えるという仮説を検証し、大学入試の評価として活用することの有効性を検討する。検証に当たっては、2018 年入学者の高校調査書であることから、高校調査書変更前の表記、また入試改革前の入試の名称を用いる。

## 3 山口大学受験者・入学者の「出欠の記録」

### 3.1 分析対象者

高校調査書の「出欠の記録」がどのような記載状況にあるのか、山口大学の 2018 年度入試の受験者 7,806 人、入学者 5,596 人のデータの中から全日制高校出身者のみのデータを用いて分析する。高校調査書は全日制、定時制、通信制高校出身者から提出があり、高等学校以外の出願資格者（帰国生徒・私費留学生・高等学校卒業程度認定試験・高等専門学校等）には調査書はない。また、高等学校出身者であっても、調査書の保存年限が経過した者の調査書はない。高等学校出身者であっても、通信制高校は基本的には出席の記載はない。そのため、通信制高校は本研究では分析対象者から除外する。このように整理すると、全日制と定時制のみになるが、定時制高校は受験者 14 人、入学者 2 人と少数であるため、調査対象者から除外し、全日制のみとする。分析対象者は表 1 のとおりである。

表 1 分析対象者

	受験者	入学者
前期日程	3,282	1,267
後期日程	1,112	332
推薦入試 I	266	141
推薦入試 II	457	125
A0 入試	343	126
分析対象者合計	5,460	1,991

授業日数は学校によって授業日数が異なっている。概ね年間 170 日以上で 200 日前後が最も多いが、最大で 267 日と記載された高校もある。高校 3 年次は出願時までの授業日数が示されている。長期の海外留学の場合も出席日数の記載がなかったり、該当日数のみの記載になっていたりする。そのため、高校 3 年間の欠席率<sup>3)</sup>を算出し、データとして用いることとする。

### 3.2 受験者の「出欠の記録」の実態

まず、受験者の「出欠の記録」の実態を確認する。

受験者の3年間の欠席率は表2のとおりである。欠席率0.0%の皆勤者が非常に多い。受験者の分析対象者5,460人のうち高校3年間皆勤だった者は1,746人で32.0%を占める。高校3年間で5日程度の欠席となる1.0%までを合わせると3,869人おり、70.9%を占める。欠席率が高い受験者は少ない。

つづいて、入試区分別に高校3年間の欠席率を比較した(表3)。推薦入試I、推薦入試IIの欠席率が低い。推薦入試は学校長の推薦を受けることから高校内での選考が行われているため、他の入試区分と比較して欠席率が低いことは明らかである。

次に、高校の学科別に高校3年間の欠席率を比較した(表4)。農業・工業・商業の専門学科が他の学科と比較して高校3年間の欠席率が低い状況にあり、職業教育を主とする実業高校の特徴がうかがえる。

また、性別に高校3年間の欠席率を比較した(表5)。性別では欠席率の平均値に差はなく、性差はないと言える。

受験者の合否別の高校3年間の欠席率の比較(表6)では、山口大学では欠席日数が評価に影響するような入試は行っていないように、合否による差は見られなかった。

表2 受験者の高校3年間の欠席率の状況

欠席率の段階	度数	%
0.0%	1,746	32.0
~1.0%	2,123	38.9
~2.0%	761	13.9
~3.0%	309	5.7
~4.0%	167	3.1
~5.0%	116	2.1
~6.0%	67	1.2
~7.0%	36	0.7
~8.0%	29	0.5
~9.0%	20	0.4
~10.0%	17	0.3
~11.0%	17	0.3
~12.0%	10	0.2
~13.0%	13	0.2
~30.7%	29	0.5
合計	5,460	100.0

※最小値はすべて0.00%

表3 入学区分別の高校3年間の欠席率比較

	度数	欠席率の平均値	最大値	F値	有意確率
前期日程	3,282	1.24%	25.40%	16.558	.000
後期日程	1,112	1.15%	30.73%		
推薦入試I	266	0.54%	7.31%		
推薦入試II	457	0.55%	10.32%		
AO入試	343	0.92%	15.61%		
合計	5,460	1.11%	30.73%		

※最小値はすべて0.00%

表4 高校の学科別の高校3年間の欠席率比較

	度数	欠席率の平均値	最大値	F値	有意確率
普通科	4,913	1.12%	30.73%	3.273	.011
理数科	232	0.95%	11.65%		
農業・工業・商業科	119	0.51%	6.81%		
総合学科	131	1.37%	16.03%		
その他	65	1.12%	7.63%		
合計	5,460	1.11%	30.73%		

※最小値はすべて0.00%

※その他の学科は英語・国際・音楽・美術・体育等を重点的に学習する学科

表5 性別の高校3年間の欠席率比較

	度数	欠席率の平均値	最大値	F値	有意確率
男性	3,262	1.13%	26.24%	1.249	.264
女性	2,198	1.07%	30.73%		
合計	5,460	1.11%	30.73%		

※最小値はすべて0.00%

表6 合否別の高校3年間の欠席率比較

	度数	欠席率の平均値	最大値	F値	有意確率
不合格	3,182	1.12%	30.73%	.383	.536
合格	2,278	1.09%	19.81%		
合計	5,460	1.11%	30.73%		

※最小値はすべて0.00%

受験者の高校3年間の欠席率と教科の評定・評定平均値についての相関分析を行った(表7)。評定値については、高校によって評価基準が異なること、また同じ高校であっても学科によっても評価基準が異なることが先行研究で明らかにされている(倉元・川又2002)。また、評定値の評価基準は地域による差があり、関東と近畿で評定基準が高いこと、公立高校と私立高校という設置者間における差がある地域もあり、関東と近畿の公立高校で評価基準が厳しい傾向にあることが明らかにされている(鈴川・山本2015)。

山口大学は、山口県、広島県、福岡県を中心に中国、四国、九州から受験者が集まっているが、関東と近畿からも13%程度受験者がいる。評価基準の差による評定値の違いが存在すると考えられるが、評定値と高校3年間の欠席率の関連をみるために、教科の評定・評定平均値はそのままの値で相関分析を行った。

高校3年間の欠席率は、教科の評定値・評定平均値との間に相関係数の値は高くはないが負の関連が見られた。欠席率が低い人ほど各教科の評定値・評定平均値が高い傾向にあると考えられる。

表 7 高校 3 年間の欠席率と教科の評定値・評定平均値との相関

		国語	地理・歴史	公民	数学	理科	外国語	評定平均値
高校 3 年 間欠席率	Pearson の 相関係数	-.176**	-.180**	-.149**	-.195**	-.191**	-.173**	-.229**
	有意確率 (両側)	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000
	度数	5,460	5,460	5,460	5,460	5,460	5,460	5,460

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

なお、高校 3 年間の欠席率も評定値同様に地域による差があるのか、地域別の高校 3 年間の欠席率比較を行った (表 8)。地域の区分は鈴川らの先行研究に合わせて分析を行った。結果、九州、中国・四国地域の高校の高校 3 年間の欠席率が低く、北海道・東北地域の欠席率が高かった。また、公立、私立による差があるのか、設置者別の高校 3 年間の欠席率比較を行った (表 9)。結果、国立、公立、私立において欠席率に差は見られなかった。

表 8 地域別の高校 3 年間の欠席率比較

	度数	欠席率の 平均値	最大値	F 値	有意 確率
北海道・東北	29	2.40%	16.03%	10.318	.000
関東	152	1.40%	13.63%		
中部	202	1.42%	26.24%		
近畿	562	1.53%	19.81%		
中国・四国	2,802	1.07%	25.00%		
九州・沖縄	1,713	0.95%	30.73%		
合計	5,460	1.11%	30.73%		

※最小値はすべて 0.00%

表 9 設置者別の高校 3 年間の欠席率比較

	度数	欠席率の 平均値	最大値	F 値	有意 確率
公立	3,987	1.09%	30.73%	.435	.647
私立	1,436	1.15%	19.81%		
国立	37	1.01%	5.80%		
合計	5,460	1.11%	30.73%		

※最小値はすべて 0.00%

### 3.3 入学者の「出欠の記録」と入学後の在籍状況と入学後の成績

次に、入学者の「出欠の記録」と入学後の在籍状況と入学後の成績について関連を分析する。入学後の成績については GPA<sup>4)</sup>を確認する。データは、2020 年 1 月末時点の在籍状況及び 2 年次前期までの GPA を用いる。ただし、工学部については GPA の算出方法が他の学部と異なるため、GPA の分析データから

は除外する。

まず、大学在籍状況別の高校 3 年間の欠席率比較を行った (表 10)。退学の高校 3 年間の欠席率平均値は高く、有意な差がある。大学の在籍状況と関連があるならば、高校 3 年間の欠席状況を入試時に確認することは有効と考えられる。

次に、高校 3 年間の欠席率と GPA の相関を分析した (表 11)。高校 3 年間の欠席率と GPA の相関係数の値は低かったが、負の関連が確認できた。高校の欠席率が高い人ほど GPA が低い傾向にあると言える。

表 10 大学在籍状況別の高校 3 年間の欠席率比較

	度数	欠席率の 平均値	標準 偏差	F 値	有意 確率
在籍中	1,957	1.06%	2.080	4.048	.018
休学中	16	1.94%	2.339		
退学	18	2.20%	2.250		
合計	1,991	1.08%	2.087		

表 11 高校 3 年間の欠席率と GPA の相関

	1 年前期 全科目 累積 GPA	1 年後期 全科目 累積 GPA	2 年前期 全科目 累積 GPA
Pearson の相関係数	-.076**	-.117**	-.120**
有意確率 (両側)	.004	.000	.000
度数	1,413	1,414	1,414

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

\*、相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

(注) 対象者は工学部を除く 1414 人。1 年前期に履修登録がなく 1 年後期から履修登録を行った者が 1 名いることから 1 年前期は人数が 1 名少ない。

ところで、調査書には「出欠の記録」の記載だけでなく「皆勤」と特記してある調査書もある。高校においては、卒業関連の儀式の中で皆勤賞表彰が行われており<sup>5)</sup>、価値あることと見なされている。「出欠の記録」を評価している大学では、「皆勤」の評価は高いはずである。

そこで、「皆勤」を評価することの有効性を検討す

るため、高校の出欠状況と入学後の GPA の関連を詳細に分析するために、3 年間欠席率 0%を「皆勤」、3 年間欠席率 5%未満だった者（皆勤以外）を「3 年間欠席率低」、3 年間のうちいずれか 1 年間の欠席率が 5%以上であった者を「1 年欠席率高」、3 年間のうちいずれか 2 年間の欠席率が 5%以上であった者を「2 年欠席率高」、3 年間全て欠席率が 5%以上であった者を「3 年欠席率高」と区分して、高校の出欠状況別の GPA の平均点を比較した（表 12）。結果、1 年前期・後期、2 年前期全ての時期において「皆勤」者の GPA が高い傾向にあり、「皆勤」者は入学後に大学の学業成績が高い傾向にあると考えられる。また、欠席率が高い年が 1 年でもあれば、GPA が低い傾向にある。高校において、やむを得ない状況があり 1 年間欠席率が高い状況にあった者、継続して 2 年間あるいは 3 年間欠席率が高い状況にあった者がいるだろう。しかし、高校で欠席率が高い年が 1 年でもあれば、大学入学後の学業成績との関連から注意が必要と考えられる。

表 12 高校の出欠状況別の GPA 比較

		度数	GPA 平均値	標準 偏差	F 値	有意 確率
大学 1 年次 前期 全科目 累積 GPA	皆勤	508	2.87	0.48	7.123	.000
	3 年間欠席率低	766	2.77	0.53		
	1 年欠席率高	87	2.62	0.62		
	2 年欠席率高	30	2.56	0.82		
	3 年欠席率高	22	2.79	0.45		
	合計	1,413	2.79	0.53		
	大学 1 年次 後期 全科目 累積 GPA	皆勤	508	2.82		
3 年間欠席率低	767	2.68	0.55			
1 年欠席率高	87	2.50	0.66			
2 年欠席率高	30	2.45	0.81			
3 年欠席率高	22	2.58	0.60			
合計	1,414	2.71	0.55			
大学 2 年次 前期 全科目 累積 GPA	皆勤	508	2.69	0.53	8.768	.000
	3 年間欠席率低	767	2.57	0.57		
	1 年欠席率高	87	2.39	0.65		
	2 年欠席率高	30	2.33	0.84		
	3 年欠席率高	22	2.42	0.65		
	合計	1,414	2.59	0.58		

#### 4 まとめ

以上の分析の結果から、高校調査書の「出欠の記録」は大学入学後の在籍状況や学業成績に関連が見られることが確認できた。しかし、高校調査書の「出欠の記録」と大学入学後の在籍状況や学業成績とに関連があっても、それを大学入試の評価に活用して良いかどうかは慎重に検討しなければならないと考える。

それは、高校の欠席率も評定値同様、地域差がある

からである。また、「皆勤」を高校が評価しているからである。卒業の際に皆勤賞表彰を行っている高校の表彰状況を確認し、皆勤者の割合を算出してみた。山口大学の地元で志願者や入学者が多い山口高校は、卒業生 318 人中 70 人が皆勤賞で表彰され、皆勤者の割合は 22.0%であった。他に、長崎西高校 12.9%、西脇高校 13.6%と確認できた<sup>6)</sup>。高校が皆勤賞表彰を行うということは、高校教育において「皆勤」を目指す指導が行われていると考えられる。このことは、職業教育を主とする実業高校において欠席率が低いこととも繋がる。

つまり、「出席の記録」は出席に対する高校の指導のあり方に影響を受けており、高校による差が生じていると考えられ、高校の生徒指導・進路指導の賜物と見ることができるだろう。それだけでなく、保護者による支援の賜物としてあらわれてくる生徒もいることだろう。いずれにしても「皆勤」を評価した場合、山口大学が評価したい個人の努力や成果とは異なる文脈を評価することになるのではないかという疑念が生じる。この疑念の部分に大学入試の公正・公平を保つことができるのかどうか確信が持てない。この点については、次の検討としたい。

#### 注

1) 例えば、関西福祉大学は、「2021 年度大学入試に関する予告」において、「調査書については、全体の学習成績の状況、総合的な学習の時間の内容・評価、部活動歴、生徒会活動歴、取得資格・検定、出欠の記録等、調査書記載の内容等を各入試および学部学科のアドミッションポリシーに合わせて配点します。」と公表し、出席の記録にも触れていた。

<https://www.kusw.ac.jp/pdf/2021yokoku.pdf> (2020.11.24 取得)

2) 例えば、同志社大学は、「2021 年度同志社大学入学者選抜における基本方針について」の一般選抜についての記載の中で、「2025 年度入学者選抜に向けて、(途中略) 文部科学省による調査書の電子化の検討状況等を踏まえ、それらの活用も視野に入れながら、引き続き検討します。」と公表している。

[https://www.doshisha.ac.jp/admissions\\_undergrad/basic\\_policy2021.html](https://www.doshisha.ac.jp/admissions_undergrad/basic_policy2021.html) (2020.11.24 取得)

3) 欠席率=欠席日数/授業日数×100

4)  $GPA = \frac{\sum (Units \times Grade Points)}{\sum (Units)}$

Grade Points=秀 4 点、優 3 点、良 2 点、可 1 点、不可 0 点、理由放棄 0 点、Units=単位数

5) 例えば、山口高校の 2018 年 3 月卒業者の皆勤表彰について

[www.yamaguchi-h.ysn21.jp/zennichi/topics/2017topics/topics02.html](http://www.yamaguchi-h.ysn21.jp/zennichi/topics/2017topics/topics02.html)(2020.3.10 取得)  
他にも多くの高校の HP で皆勤賞表彰が報告されている。  
例えば、  
長崎西高校

[www.nagasaki-nishi.ed.jp/modules/wordpress/index.php?p=1937](http://www.nagasaki-nishi.ed.jp/modules/wordpress/index.php?p=1937)(2020.3.10 取得)  
西脇高校  
[www2.hyogo-c.ed.jp/~nishiwaki-hs/weblog2/?p=30226324](http://www2.hyogo-c.ed.jp/~nishiwaki-hs/weblog2/?p=30226324)(2020.3.10 取得) など。

- 6) 5) で紹介した 3 つの高校の HP。  
山口高校は卒業生 318 人中 70 人が皆勤賞。皆勤者の割合 22.0%。  
長崎西高校は卒業生 270 人中 35 人皆勤賞。皆勤者の割合 12.9%。  
西脇高校は卒業生 258 人中 35 人皆勤表彰。皆勤者の割合 13.6%。

## 参考文献

- 倉元直樹・川又政征 (2002)。「高校調査書の研究—「学習成績概評 A」の意味—」『大学入試研究ジャーナル』**12**, 91—96.
- 林寛子 (2018)。「AO 入試の高校調査書を用いた加点評価による入試改善の評価」『大学入試研究ジャーナル』**28**, 221—226.
- 日下田岳史・福島真司 (2019)。「高校調査書の評定平均値は大学入学後の成績を予測できるのか 指定校推薦入試の事例分析」『大学入試研究ジャーナル』**29**, 61—66.
- 平井佑樹 (2017)。「調査書の評定平均値を用いることによる志願者の基礎学力予測 大学入試センター試験得点率を用いた補正值の利用」『大学入試研究ジャーナル』**27**, 135—141.
- 平井佑樹 (2018)。「平成 33 年度入試以降の一般選抜における調査書の活用に関する一考察」『大学入試研究ジャーナル』**28**, 201—207.
- 宮下伊吉・飯田和生 (2019)。「高校での学習成績の状況と大学入学後の成績との関連性」『大学入試研究ジャーナル』**29**, 229—233.
- 文部科学省 (2015 年 1 月 23 日)。「高大接続改革実行プランの策定」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/_icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf) (2020 年 11 月 24 日)
- 並川努・吉田章人・坂本信 (2019)。「調査書の「指導上参考となる諸事項」の記述についての検討 パーソナリティおよび学力の 3 要素に関する記述に注目して」『大学入試研究ジャーナル』**29**, 203—208.

- 鈴木由美・山本知弘 (2015)。「高等学校の調査書における学習成績概評の評価基準」『大学入試研究ジャーナル』**25**, 137—142.
- 吉村幸 (2019)。「一般選抜前期入学者選抜における調査書の活用について」『大学入試研究ジャーナル』**29**, 67—72.